

## 第33巻第1号特集 「主伐と更新」への投稿募集

平成29年3月に鹿児島大学を会場として「次世代の森林づくりに向けて—その最前線で課題を問う—」と題する森林利用学会シンポジウムが開催されました。このシンポジウムでは、全国に先駆けて人工林資源が本格的な利用期を迎えた南九州地域において、素材の大径化に対応した作業システムの見直し、一貫作業システムによる事業採算性の確保、再生林のための苗木の増産など、次世代の森林づくりに向けた課題について議論を行いました。

これまで拡大造林された森林において間伐の推進が全国的に図られてきましたが、伐期を迎える森林が増加し、未利用木材を含めた木質資源の供給を拡大するために、一部地域において皆伐の推進が図られています。ただし、森林の公益的機能を維持しながら、持続的に林業を行うためには、植栽による確実な更新を図る必要がありますが、現在の日本の皆伐収入では再生林費を賄えないのが一般的であります。そのため、伐採と造林の一貫作業システムの導入、コンテナ苗や成長に優れた苗木の活用、低密度での植栽、機械化等による低コスト造林技術の開発・実証等による再生林コストの低減を図る事業が進められています。

一方、多様で健全な森林を造成していくためには、一定の広がりにおいて様々な生育段階や樹種から構成される森林がモザイク状に配置されている状態を目指し、自然条件等を踏まえつつ、複層林への移行や長伐期化等による多様な森林整備を推進することも重要です。

そこで本特集では皆伐に対応した路網、機械、伐出技術、作業システム、労働安全や、皆伐と再生林における低コスト化、環境や生態系への影響、さらには長伐期択伐作業や天然更新など幅広く主伐と更新に関する原稿を募集することといたしました。これによって、主伐と更新に関する現在の技術を取りまとめ、次世代の森林づくりの方向性を見出すきっかけとなれば幸いです。

本特集は、平成30年1月末発行の森林利用学会誌第33巻1号への掲載を予定しており、平成29年8月21日（月）まで原稿を募集いたします。原稿区分は、論文（研究・技術）、速報、研究・技術資料、抄録、雑録などいずれでも結構ですので、会員の皆様からの多数のご投稿をお待ちしております。

森林利用学会誌編集委員会